雨詩第一章 されど人はその歴史を知らず

スチール缶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨詩第一章　されど人はその歴史を知らず

【Ｎコード】
Ｎ４７２２Ａ

【作者名】
スチール缶

【あらすじ】
一人の少女がある青年に出会う時、運命は大きく動き出す…。賞金稼ぎの町で紡がれるドタバタコメディ魔法バトルファンタジー。

プロローグ（前書き）

一応誰でも見れる表現を使っていますが、多少暴力的且つグロテスクな表現有りです。気分が悪くなったらすいません。

プロローグ

プロローグ
燃えている。全てが燃えている…。町の残骸すら無ければ、人が住んでいた痕跡すら残っていない。
まさに…
虚無
そんな炎だけが揺らめく世界の中に、二つの影があった。
巨大な影と小さな人のような影。
どうやら人のような影は十代後半の少年だった。少年は漆黒のローブを身に纏い、無表情に燃え続ける世界を見続けていた。
「……」
すると、さっきまで微動だにしなかった巨大な影が少年に寄り添うように動いた。
それにより、巨大な影の姿が露になる。
それは全長５０ｍはある機械の龍だった。
機龍は少年の前で立ち止まると、少年はを炎から守るようにその場に座り込んだ。
その行動に今まで無表情だった少年が優しく微笑んだ。
「ありがとう、ファーフニル…」
そして機龍の体を優しく撫でた。だが少年はすぐに元の無表情になり、
その世界から立ち去ろうとした…。その時だった。
ぽつり、ぽつりと雨が降り出し、今まで炎に支配されていた世界をかき消していく…。
「ふっ…」
その中で少年は力無く笑い、ただ立ち尽くしていた。雨は激しく降り続けた。

それはまるで…
少年の心を表す様に…
＋＋＋＋＋＋＋
統合歴２０１０年。人は新たなる種族と交流を果たした。それは“異界”と呼ばれる世界からの住人“精霊”である。
彼らは自分達の世界を失った難民的立場にあり、人類はこれの保護を決定し、両種族間で同盟が結ばれたのだった。
そして精霊たちはその恩返しとして人類にある知識を与えた。
“魔工学”である。
その知識は人類の今での科学を遥かに凌駕する物であり、人類のこれまでの諸問題を解決できる力を秘めていた。
こうして、人類は繁栄を極めるはずだった。
そう…、あの悲劇が起きるまでは。“それ”は突然降って来た。
アメリカ・ニューヨークに隕石が落下、その中から地球外生命体が一体出現し、その地球外生命体“エンド”は、全人類に宣戦布告、全面戦争に陥った。
この戦争は千年も続いた…。
エンドは自分以外は守人と呼ばれる三人の人工精霊しかいないにもかかわらず、人類は勝利する事ができなかった。
しかし、戦争は意外な形で幕を閉じる。
いきなり現れた五人の戦士により、戦局は一変し、エンドは倒された。　のちに破壊神対人戦争または千年戦争とと呼ばれる戦いは、死者３１億人、世界の３大陸消失という傷跡を残しつつ、集結した。
それから約４５年が過ぎた。

第一話「賞金稼ぎの町」

第一話

「賞金稼ぎの町」

あの戦争から約４５が経過した。

だが未だにその傷跡は、多大な影響を及ぼしている。　千年にも及ぶ戦争で多くの国が崩壊し、現在国として存続しているのはアメリカ・日本・ロシア・中国だけとなり、他の地域では自治政府がその支配を行っている。

しかし、それに伴い、治安の悪化、犯罪者の増加などの問題に悩まされていた自治政府は、自治政府連盟を結成。

新たに“賞金稼ぎ”制度を実施した。

これにより、各自治政府の指定した犯罪者の取締が強化されたのである。

そして、ここはその賞金稼ぎの連盟本部がある町“ニーベルンゲン”。　別名賞金稼ぎの町、その城壁の前に一人の少女が立っていた。

十代前半といった感じで、銀髪の長い髪を後ろで一つにまとめていた。　まだ少し幼さが残るが、無表情な感じが、少女の印象を鋭いものにしていた。

そんな少女、静菜　　チェルは賞金稼ぎになろうとこの町に来たのだが…、

チェルはある問題に直面していた。

彼女はじー、と上の方を見上げる。　その視線の先にはインターホンらしき物があり、そこには

「ご用のある方はどうぞ押してください」

と書いてある。

それを押せば中に入れるのだが、彼女には押せない理由があった。
それは…
背が届かないのだ。
どんなに背を伸ばしてもジャンプをしてもどうしても届かない。
そのため彼女はかれこれ一時間この場所で立ち尽くしているのだ。
「はぁ……」
とチェルは深い溜め息を付いた。
このままだと一生中に入れず、賞金稼ぎになれないのではないかという暗い考えが頭をよぎるが、チェルは頭をぶんぶんと振り、暗い考えを吹き飛ばす。
「ここで…、あきらめたらダメ、前向きに考えないと…」
と自分に言い聞かせる様に呟いた。　そして、チェルは城壁に向かっていきなりボツりと呟いた。
「開け…ごま」
シーン…
だが城壁は何の反応も示さない。
「やっぱり、こんなんじゃ開く分けないよね…」
とチェルが苦笑いをした、その時だった。
低い機動音とともに城壁の門が開いた。
「嘘…、開いちゃた」
とチェルが驚いていると、どこからともなく声が聞こえて来た。
《ようこそ！賞金稼ぎの町へ。我々はあなたを歓迎します》
その言葉を聞きチェルは半ばあきれながらも中へと足を踏み入れた。
＋＋＋＋＋＋＋＋
「うわぁ…」
チェルは思わず感嘆の声を漏らす。　整備された道路、区画ごとに整理されてごちゃごちゃとしていない町並み、そして、見上げるのが大変な高層ビル群。
この近代的町並みがチェルにはどれも新鮮に見え、ついつい田舎者なのが丸出しだった。　一通り町の外観を見終わった頃にチェルは

当初の目的を思い出す。
（いけない、ついうっかりしてた）　そうチェルはここに賞金稼ぎになるためにやって来たのだ。
だが、誰もがそう簡単に賞金稼ぎになれる訳ではない。
ここ、ニーベルンゲにある賞金稼ぎ同盟の本部“ミカエル”で登録と試験を受けなければ、賞金稼ぎとして認められないのだ。
そして、チェルは“ミカエル”への道を地図で確認しながらその場所へと向かったいった
＋＋＋＋＋＋＋＋

「静菜　チェルさんでしたね。書類上は問題ありませんよ。
後は試験のほうだけです」
書類を見終えた女性審査官はチェルにそう言った。
チェルはひとまず胸を撫で下ろす。　だが、まだ本試験の方が残っていた。
チェルはその子とを女性審査官に尋ねた。
「あのー、試験の場所は？」
「あぁ、それならここですよ」
とチェルの質問に女性審査官は一枚の紙を差し出した。
そこには、ニーベルンゲンの町全土の地図が書かれており、ある一点に赤い線が引かれていた。
「喫茶稼ぎ時…、もしかしてここが」
「えぇ、そこが試験会場ですよ」
それを聞き、チェルはガクッとこけそうになる。
「こんな所でですか？」
「ふふっ、そうよ。まぁ行けば解るからとにかく行きなさい」
女性審査官にそう促され、チェルは怪訝な顔をしながらもその場を後にした。

第一話「賞金稼ぎの町」（後書き）

えー、とりあえず書いて見たのですが、なんつーか自分才能ないですね。　　まぁ、それでも見てくださった方、誠にありがとう御座います。　　第二話でやっともう一人の主人公が出てきますので…　では多くの人に読まれることを願いつつ…

第二話「試験開始」（前書き）

喫茶へと到着したチェル。そこで待ち受けていた試験とは？

第二話「試験開始」

第二話

「試験開始」

その喫茶の見た目を一言で言うと…

「ボロッ…」

チェルはおもわずそう呟いてしまう　。

このコンクリートの高層ビル群においてその喫茶は異質な存在だった。　一昔前の様な木造建築で、モダンな感じではあるが、チェルが本気で蹴りをいれれば、崩れてしまいそうだった。

そんなボロ喫茶のドアの前でチェルは一度深呼吸をしてから中に入った。

＋＋＋＋＋＋＋＋

カランコロンと鈴の音がなり、チェルは中へと入った。

やはり中も西洋モダンな感じで、店内はとても落ち着いた風意気を醸し出していた。

店内には四人の人間がいた。

バーカウンターの中に店長らしき２０代前半の眼鏡かけた青年が皿を拭いていた。

そして、そのバーカウンターに十代後半くらいのサングラスをかけ、スーツを着た青年がのんびりとグラスに入っている何かを飲んでいた。

さらに、右側に並べられている机とイスの一つに、これまた２０代

前半くらいの男女が座っていた。
男の方は怖面な顔をしており、その大柄な体格が、彼をよりいっそう威圧的なものにしていた。
しかし男は、顔に似合わず分厚い本を熟読中だった。　女性の方は、和服を着ており、清楚で大人の女性といった印象をチェルは受けた。
女性が静かに紅茶を飲む姿さえ、まるで一枚の絵のようだった。

みんな思い思いの時間を過ごしていた…。

だが…

その空間に一人取り残されている人物がいた…。

チェルだ。

（この状況で話しかけにくい）

だが、だからといってずっとこのままという訳にはいかない。
チェルは意を決して、精一杯大きな声を出した。
「あの…すみません…」

シーン

四人全員から反応なし。
というより気がついていない様子。　仕方なくチェルは更に大きな声で再度呼び掛ける。

「あのっ！すみません！」

シーン

しかしまた四人全員から反応なし。

ぷちん

チェルの中で何かが切れた音がした。
「あのー！！さっきから呼んでるんですけどっ！！」
　すると、皿を拭いていた店長の青年が、チェルに話しかけてきた。
「あ、いらしゃい。いやー全然気がつきませんでしたよ」
「全然…」
その一言がチェルの頭の中にこだまする。
（私てそんなに存在感無いのかな）　と気落ちしてしまう。
そんなチェルが沈みこんでいる中で、他の三人もチェルがいる事に気がついたのか、思い思いの事を口にする。
「いやー、マスター。明日は雨だね。
マスターの店に平日に僕ら以外の客が来るなんてまさに奇跡だ。」
と、バーカウンターに座っている少年は大袈裟に両手を広げながらそう言った。
すると、マスターと呼ばれた青年は苦笑しながら
「失礼ですね。それじゃあまるで、私の店が休日以外はほとんどお客が来ないみたいじゃないですか」
「事実じゃねぇか」
と長身の男がマスターにツッコミをいれる。
和服の女性もうんうんとそれに頷き賛同した。
「皆さん手厳しいですね」
少しはぶてた顔をするマスターを無視して、バーカウンターの青年はチェルに話しかけてきた。
「君、名前は？」
　青年は優しく微笑むが、緊張しているチェルはなかなか自分の名前を言えない。

すると長身の男が見兼ねたように青年に言う
「馬鹿野郎。名前を名乗るならまずはこちらから　だろ」
「あっ　それもそうだね。僕の名前は神裂　トレント。ま、よろしくね」
「俺は円谷　狼牙。困った事あったらなんでも言いな」
「うちは、咲杜言います。チェルさん以後よろしゅう」
それに、つられてチェルも自己紹介をする。
「えっと、静菜　チェルです。よろしく…お願いします」
「じゃあ、何かご注文は？」
マスターにそう聞かれ、チェルは考える仕草をし注文をしようとする。　「えっと、じゃあ」
とそこまで言いかけてチェルは当初の目的を思いだし、両手をブンブンと振る。
「あのっ、そうじゃなくて、私賞金稼ぎの試験を受けに来たんです！」
「なんだ…、そうだったんですか。少し残念です」
ガクッと残念そうに肩を落とすマスター。
それをなだめつつも、トレントはチェルの方を見て
「へー、じゃあ君書類審査の方は通ったんだ。それだけでも結構すごい事だよ」
関心しているトレントに、チェルが質問をした。
「それで、ここで行われる試験ってなんですか？」
「それはうちから説明するわ～。ここで行われる試験ゆうんは、三つあってな～。
第一試験は狼牙が、二次試験はトレントが、最終試験はウチがやるよ～」
と咲杜が優しく説明する。
「三つの試験…」
チェルは神妙な面持ちでその内容を頭の中で噛み締める。
「まぁ、別に死ぬわけでもないから、気楽にいこうよ。気楽に」

トレントにそう言われ少し気が楽になるチェル。
しかし…
咲杜の次の一言で全てが水の泡になる。
「でも、楽しみやわ～。最近大抵トレントの二次試験でみんな脱落してしまうんやもん。　チェルちゃんは頑張って、ウチのとこまで来てな～」
「えっ！？」
咲杜の言葉に凍り付くチェル。
だがその真実にツッコム前に容赦なく第一試験が開始される。
「おい！いつまで凍り付いているつむりだ？
まずは第一試験を通る事を考えな」
狼牙の言葉に、ハッとチェルは我に帰り、気を引き締めた。
（そうだ…。今は最初の試験に集中しよう）
こうして、チェルの賞金稼ぎ採用試験が始まった。

＋＋＋＋＋＋＋
「じゃあ、試験の内容を簡単に説明するぜ。
おい、チェル。あそこにある白い線が引いてある場所に立て」
狼牙の指示した白い線のある場所にチェルは言われたとうりに立つ。
すると、狼牙はチェルの立つその場所から１５ｍほどはなれた場所に、チェルの正面に立った。
そして、どこからともなく取り出したビー玉をいきなりチェルに投げ付けた。
ビー玉は風を切り、ビュンと音を立てながらチェルの横をかすめた。
「なっ…」
「第一試験の内容は簡単だ。このビー玉を四つ。その線の上から動かずに止めろ。方法はなんでもいい。
体で受け止めるなり何なり。好きにしろ。まぁ受け止められればの

話だがな」
と狼牙はまた、容赦なく。しかも今度は四つ同時にチェルに投げ付ける。
「つっ！」
チェルはなんとか四つ全部を避ける。
だが、休む暇も無く、すぐに次のビー玉が飛んで来た。
「おらぁおらぁ！　気抜いてると線から動いちまうぞ！」
その様子を遠くから見ていたトレントと咲杜。
トレントは誰に言う訳でも無く呟いた。
「賞金稼ぎには瞬時の判断力と勇気が必要である。
この一次試験ではそう言う面をチェックするんだけど…。
あの子、大丈夫かな」
「う～ん。ウチは大丈夫や思うけどな～。まぁ、あの子次第やないの～」
二人はチェルの方に目をやった。
すでに軽く汗をかき、多少疲れている感じだった。
それを見た咲杜は素直な感想を述べた。
「これは、ダメかもしれへんな～」
＋＋＋＋＋＋＋＋
チェルは狼牙の攻撃を避けながら考えていた。
どうやってあの攻撃を止めるか。
狼牙の投げるあの四つのビー玉は全部変則的な動きをし、しかもどれもチェルが立っている線から動くように投げてきている。
このままでは、確実に体力を消耗し、チェルは一次試験で脱落してしまう。
そこでチェルは狼牙の投げる変則的な投げ方に弱点がないかを探り始めた。
「おらぁ！」
狼牙が同時に四つのビー玉を投げる。
ふとその時、チェルはある事に気が付いた。

狼牙の投げる四つのビー玉は最初は皆集まっているが、途中で何かに弾かれたように、変則的な動きをし、チェルに襲いかかって来る。
（これだ…！）
チェルは狼牙の投げの弱点を発見し、心の中でにやりと笑う。
そうとは知らず、狼牙はまた、チェルに向かってビー玉を投げた。

次の瞬間

チェルは自分の腰にあるホルスターから、リボルバー式の拳銃を取り出し、目にも止まらぬ速さで四つの弾丸を撃った。
その弾丸は、まだ拡散する前のビー玉を的確に捉え、　四つのビー玉全ての動きを強制的に停止させた。
それを見て、狼牙は大笑いをした。　「だーはっはっはっ。
いや、お前すげーな。初めて見たぜこのビー玉をそんな止め方する奴。　合格だ、チェル。第一試験はこれで終わりだ」
そう言って、狼牙はチェルの頭をクシャクシャと撫でた。
「まぁ…、次はトレントの二次試験なわけだが。
頑張れよ…」
と、チェルに同情のまなざしを送る。
（二次試験…、そんなにきついんだ…）
チェルは内心ビクビクしながら、トレントの座るバーカウンターに向かう。
すると、トレントは笑顔でチェルを迎えた。
「いやー、まぁとりあえずお疲れ様。
喉乾いてないかい？何か飲む？」
トレントの明るい対応に少し拍子抜けしつつも、さっきの試験で、喉が乾いているのは事実なので、何を頼もうかと悩んでいると、トレントがあるものを勧めてきた。
「炭酸なんてどうだい？」
「あ、じゃあ…それで」

チェルは何も考えずにそれを頼んでしまう。
その一言が二次試験の内容を左右するものとは知らずに
マスターによって炭酸水がチェルの前に差し出され、チェルはそれを一気に飲んだ。
炭酸独特の、喉が焼けるような感覚を感じながらも、チェルは素直な感想をトレントに述べた。
「おいしい…です」
（（あーあー。やっちゃった））
内心そのやり取りを見ていた狼牙と咲杜はチェルに同情せずにはいられなかった。
なぜなら、その一言で、トレントに火が着いたのだから。
キラーン
チェルはその時、トレントのグラサンの奥の目が光ったような気がした。
「ふふっ、チェルもそう思う？だってその炭酸は千年戦争が始まる前に存在した炭酸の復刻版で、あの当時の味を忠実に再現しー」
うんぬんかんぬん。トレントの炭酸のマニアな話が始まった。
三十分経過…
トレントの話はまだ続いていた。
正直チェルはいつ二次試験が始まるのだろうと思いながらも、楽しそうに炭酸の話をするトレントの話を中断するのは悪いと思い、大人しく話を聞いていた。

だが実はこれが二次試験の内容だった。
「賞金稼ぎには忍耐力も必要である。て言う訳で、トレントの長話を聞くのを途中で諦めたら脱落なんだが…」
「最初に勧められた炭酸を飲むか飲まないかで全然話す長さか変わるんや～。
チェルちゃん、可哀相やわ～。
あと二時間は続くわ～」
「あいつ、炭酸の事となると妙にマニアックになるからな…」
そんな二人の会話をよそに、トレントの炭酸話はまだまだ続きそうだった…。

二時間三十分経過
（うざっ…）
さすがに心の広いチェルでも我慢の限度というものがある。
こんなにも長く、しかもずっと炭酸の話を聞かされ、いつまで経っても始まらない二次試験。
チェルのイライラが頂点に達しようとしていたその時だった。
「ふぅ。
まぁこんなとこかな。
という訳で、二次試験合格だよ」
「えっ！？」
チェルはいきなりのトレントの発言に固まってしまう。
それを察したのか、トレントが補足説明をした。
「実は二次試験は忍耐力をテストするもので、僕の長い話を最後まで聞けたら合格なんだよ」
「はぁ…」
いまいち納得のいってない感じではあったが、合格といわれたので、チェルは一応安心する。
残るは最終試験。　咲杜だけである。　すると咲杜はニコニコとし

た笑顔を送りながら、チェルに話しかけて来た。
「チェルちゃん、ウチの最終試験は喫茶の中でやるのは迷惑なんよ～。　悪いけど外までついて来てくれる～」
「あ、はい…」
チェルは咲杜にいわれるまま喫茶を後にする。
外に出ると咲杜はチェルと一定の距離を取り、先ほどと変わらぬ笑顔で、チェルに告げる。
「ウチの最終試験わな～。
ウチと戦って、ウチに一発でも攻撃を当てることなんよ～」
「つっ…！」

最後の試練がチェルの前に立ちふさがった…。

第三話につづく

第二話「試験開始」（後書き）

いやーやっと第二話書き終わりました。
ほんとウスノロでスイマセンｍ（＿＿）ｍとりあえずチェルは最終試験を合格することが出来るのでしょうか？　第三話にご期待ください。（またかなり時間かかりそうですが…）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4722a/

雨詩第一章 されど人はその歴史を知らず

2010年10月9日06時31分発行